

AFTERNOON TEA

ブランダイス大学心理学部

吉田 盛史

私の最近の読書事情

皆様、はじめまして。川口真也博士(京都大学)よりバトンを受け取りました。川口さんは私の大学院生時の先輩でして、私が研究室に入った時にはすでに研究室の中心的な存在として精力的に仕事をしておられ、私にとっては追いつけ追い越せと、目標とする研究者の一人です。

現在、私は米国、ブランダイス大学、Donald Katz 博士の研究室で味覚の中樞神経機構の研究を行っています。行動中ラットからの細胞外記録を主な手法として、大脳皮質味覚野の活動を調べています。特にラットが単純に味覚溶液を摂取している状況や味覚弁別課題遂行中等、動物が置かれた状況に応じて神経活動が変化するのか、ということに興味をもって研究を行っています。

私は面倒くさがりで無趣味な人間なのですが、比較的小説を読むのが好きで、読書が唯一の趣味というか研究の息抜きとなっています。学部生のころは部屋に引きこもって、ひたすら文庫本を読んでいた時期もあり、今思い返すと、その頃に読んだ「BRAIN VALLEY」(瀬名英明)や「アルジャーノンに花束を」(ダニエル・キイス)が脳研究に進むきっかけであったのかもしれませんが。

日本では、本屋に行き、棚に並ぶタイトルを眺め、気になったものを手に取り、表紙のイラストを見たり裏表紙のあらすじを読んだり、あるいは少し立ち読みする、というのがささやかな楽しみでした。渡米後、せっかくアメリカにいるので原書に挑戦をと、本屋に行ったのですが、本棚にずらりと並ぶペーパーバックの背表紙を見た瞬間に愕然としました。装飾された字体で書かれた英語は読みづらく、私の語彙力では意味がわからないものが多い、そして、そもそも一見してタイトルなのか作者名なのかがわからない、という状況に、

すぐさま私の脳は拒絶反応を示し始め、私の中の本屋のイメージは心休まる場所から一転、忌避すべき場所と再学習されてしまいました。その後しばらくは本屋から足が遠のいていたのですが、時間つぶしに入った本屋でたまたま目にしたのが、好きな作家の一人である村上春樹氏の作品でした。海外作品の中に交じって Murakami の文字と見慣れたタイトル(正確にはその英訳)が並んでいるのを目にした時は、これぞまさしく砂漠でオアシスを見つけた瞬間の心境かと思える程、感激しました。ほとんどの村上作品は英訳されており、新作は新作コーナーで平積みされているのを目にし、あるいは、村上作品を買うとレジで店員さんから「私もこれ好きだよ。」など声をかけられることもあり、アメリカでの人気の高さを実感します。ちなみに初めて買ったのは「ねじまき鳥―」で、日本語で読んだことがありストーリーもわかっているのですが、意外にすんなり読め、しばし村上ワールドに浸ることができました。その後、「世界の一」、「神の子―」、「ノルウェー」と来て、現在は「海辺の一」を読んでいる最中です。ちなみに、2009年8月には私の大好きな作品の一つである「姑獲鳥の夏」(京極夏彦)の英訳版が発売されるとのことで、待ち遠しい限りです。

村上作品は好きなものばかりなのですが、英語なのでしばらく読んでいると疲れてきて、さらなる息抜きが必要になってきます。そんな時に役に立っているのが漫画です。私は漫画を読むのも好きで、日本にいた頃は、実験後、毎日のように深夜のコンビニで漫画雑誌を立ち読みするのが日課となっていました。さすがにアメリカには立ち読みができるコンビニはありませんが、日本が世界に誇る文化「マンガ」だけのことはあり、アメリカでも“Manga”を手に入れることができます。Manga は英単語としてすでに市民権を得ており

卵」という比喩も象徴的でした。私が熱心な読者の一人であることもありますが、国際的に評価された作家の言葉ということで、聴く人の心打つスピーチであったと思います。

では無名である自分がどうやって人の心に訴えるスピーチ、プレゼンテーションを行うことができるのか？ 上の二例から「偉大な人間」の部分をひいて考えると、まずはどちらもタイミングが良いことが挙げられます。国民の期待と世界情勢が傾くときとがマッチして発言されたことで、聴く人の深い理解が得られたのだと思います。研究発表でいうと、多くの研究者がまさに今知りたかったことや、そのときの社会的なニーズに応えた内容が含まれていることが当てはまると思います。また「Change」や「壁と卵」といった頭に残るキーワードがあったことも挙げられ、特別な言葉でなく、ありふれた言葉の中に意味を持たせて

いました。例え方、言い換え方の巧さと言えるかもしれませんが、それは、聴く人に合わせた上ですることで、どういう人に聴いてほしいのかを考える必要があるのだと思います。

と、ここまで書いてきたところで、自分でちょっと思いつくようなテクニックは、敬遠していたスピーチのハウツー本に載っているのでしょうか。それをみんなが身につけているのだとしたら、あとはやはり研究内容と人間性がプレゼンテーションの良し悪しに表れてくるのだということになり、また振り出しに戻ってしまいました。ただ今後は、自分の発表と情報収集だけにとどまっていた学会会場で、上手なプレゼンテーションを探しに他分野の発表まで足を運ぼうと思っています。次回の岩手の生理学会大会会場で写真左の顔を見かけたら、最高のプレゼンテーションをしてください。よろしくおねがいします。

名古屋市立大学看護学部生理学

山本 喜通

私の生理学的半生

東京学芸大学 吉野正巳先生からバトンを受けました。人間歳を重ねるとその分昔話が多くなりますが、しばらくお付き合いください。

世の中のかなりの人が、生理学なる学問が存在することに一生気がつかないと思いますし、私がある中にもどっぷりつかっているのにも必然的な理由などないのかもしれませんが、小学生の頃は血を見るのが嫌いでした。もっとも、血を見るのが好きな子供などドラキュラ伯爵の子孫以外にいないかもしれませんが、ですから、小学生の時には将来の夢として理学博士と書いています。漠然と理学博士なら血を見なくてもよいと思っていたようです。

中学校ではカエルの解剖実習に際し、担当の生物教師が、我々生徒がカエルを捕ってきたら実習してやる、と今ならとても許されそうにないことを言い出しました。そこで仕方なく母親の実家の田舎に赴き、当時はまだたくさんいたカエルを大

量に捕獲して無事解剖実習を終えました。かといって生き物に興味があったわけではなく、生命を扱わない物理の方がよほど好きでしたが、自分に物理学の天賦の才能があるとの誤解は幸いにも抱いていませんでしたし、進学に当たっては現実的に医学部を選択しました。そして生理学との出会いが訪れます。

当時のカリキュラムでは3年次に解剖学、生理学、生化学の3科目が並行して進められたのですが、私はなぜか生理学にもっとも惹かれました。生理学実習も今よりずっと熱心に（学生も教員も）、夜の10時、11時までやっていた記憶があります。今でもよく覚えているのはウサギ頸動脈のカニューレションで、小坂助教授（当時）の「指を使って丁寧に頸動脈を剥離しなさい。指はフィンガーマスです。」という指示に従い、血なまぐさいにおいの中で手袋なしの指にウサギの体温と脈動を感じました。解剖学（生命なきご遺体）や生化学（試験管）にない生理学の魅力を実感した出来事でした。

生理学の魅力にとりつかれた私はその後卒業まで、堀田教授（故人）の主宰する生理学教室で研究のまねごとをさせていただきました。朝登校するとまず研究室に荷物を置き、講義や臨床実習にはそこから通い、夕方から実験を始めます。そんな具合ですから、実験が終わるのは夜遅い時間になり、時には研究室の簡易ベッドで夜を明かすこともありました。さすがに6年次にはベッドサイドが忙しくてあまり実験はできませんでしたが、それでも教室を根城としておりました。

卒業後は当然生理学に進むものと同級生は思っていたかもしれませんが、ただ、私の中ではそれまでのアマチュアから生理学のプロとなることへの不安が払拭できず、安定な職業としての臨床医の道を選択して内科の大学院に進学しました。大学院とはいっても4年間のうちのはじめの2年は研修医そのもので、同僚研修医にはまがりなりにも研修医手当なるものが支給されていたのに対し、こちらはそれがもらえないどころか学費を払わなければならない立場に疑問を持ったものです。そんなわけで、実際に研究できたのは後の2年間だけということもあり、再び生理学教室で何とか手っ取り早く結果を出すべく血管平滑筋の研究を行いました。臨床医として患者さんに関わるのはそれほど苦手ではなかったのですが、やはり臨床の場には自分の居場所がないように感じられ、大学院修了後1年半のお礼奉公の後、晴れて生理学教室の助手となりました。既に30歳になっていました。

現在は平滑筋および血管内皮細胞のパッチクランプを生業としております。それまで慣れ親しんだ微小電極をパッチ電極に持ち替えたのは生理学教室の助手となって数年後でしたが、全くの手探り状態でした。その後2年間いたNew York State University, Downstate Medical CenterのDr. Eric Kao(故人)のラボでも指導者には恵まれませんでしたでしたが、実験環境だけは十分整えてもらえたので何とか独学で技術をマスターでき、Dr. Kaoに手配してもらったMS-DOSパソコン(NEC輸出専用)とA/D-D/A converterのISAボードを携えて帰国しました。帰国後は実験対象をそれまでの盲腸紐から血管平滑筋に変更したのですが、生きのよいsingle cell標本作りに悪戦苦闘しておりました。そんな中、研究室を訪問中のDr. David Hirstが作って見せてくれた腸間膜細動脈標本にヒントを得、細動脈の外膜をはがしたり内外を反転したりした標本を作りました。現在は血管内皮細胞層を単離した多細胞標本を使って実験しています。多細胞標本導入以来、必要に迫られてgap junction channelの勉強もするようになりました。

私がやってきた電気生理の実験は基本的に自分一人で行うものです。ですから、勢い自分一人の力でこれまでやってきたと誤解しがちですが、実は多くの人に支えられ、多くの人に影響されて今日がある、21歳での出会いから今日までの生理学的半生を振り返って今感じていることです。